

ドラッカー・ブックレビュー

「もう一つの会計」を知る一冊

林 總 著 『ドラッカーと会計の話をしよう』 中経出版社

評者 佐藤等

職業会計人がドラッカーと向き合うとき、不思議な違和感にとらわれるのは私一人ではないと思う。これまで常識と思っていたことが、ことごとく覆されていくからだ。たとえば本書にも取り上げられている「利益は存在しない」という表現が典型である。職業会計人の主たるフィールドである制度会計あるいは財務会計は、世の中一般では「会計」と呼ばれている。ドラッカーの書著群は、「会計は何種類もある」という現実をわからせてくれる。

ドラッカー流に言えば「会計は道具である」。道具には目的がある。しからば制度会計の目的は何か。たとえば上場会社等が行っている会計は、証券取引という制度の信頼性を担保（投資家保護）することを目的に一定のルールを定め、これに基づいて企業内容の開示を求める。また中小企業になじみ深い税務会計も課税額の算定を目的に定められた一定のルール（税法）に基づいて各種書類を作成することを求める。

それぞれの制度に、それぞれのルールがある。私たちは、知らず知らずのうちにその制度会計を「会計」そのものだと錯覚している。『事業年度という暴君』から自らを解放しないかぎり、合理的な事業のマネジメントを行えない」というドラッカーが紹介した言葉を著者は引用している。決算が1年であることで短期思考となる。制度に思考が歪められるという現実である。バランスを欠いた状態である。

長期と短期のバランスをとれとドラッカーは言う。「暴君」が我がもの顔で振舞う現実に著者は疑問を抱き、主人公の町田純一を相手に未来の利益やキャッシュフローに目を向けさせ、利益の源泉を追求してみせた。

さらに著者は管理会計にも踏み込んで主人公の目を開かせていった。著者は、ドラッカーを最先端の管理会計学者であると形容した。活動基準原価計算（ABC原価計算）などをドラッカーがその著書で取り上げたからである。とりわけ『創造する経営者』は、会計の専門家から見ても示唆に富む著作である。

会計は道具である。経営やマネジメントを成果あるものに導く情報を提供するという目的をもった道具である。それは投資家や債権者保護、あるいは税金計算のためではなく、組織に属する一人ひとりのものである。ドラッカー流に言えば、第一義的には株主のものでさえない。成果を測定し、自らの貢献を測る一つの重要な尺度が会計情報である。それがマネジメントに役立つ会計本来の姿である。

「原価計算の教科書には、会社ではどんな活動がおこなわれているか、そして、どのようにすれば会社内部の活動をつかむことができるかについて、なにも書かれていなかった」という著者の一言が心に突き刺さる。私たちが目にしている「会計」は、目的の異なる会計。マネジメントの役に立つ会計とは、異なるものである。

本書は、乱気流の中を経営する者にとって真に必要な「会計」、おそらく多くの人が、まだ目にしたことのない会計とは何か気づかせてくれる。本書により、真に必要なもう一つの「会計」を知る一歩となることを期待してやまない。